

ブラックアース（下）

◇目次

第8章 アウシュヴィッツの逆説

3

第9章 主権と生存

31

第10章 グレイな救済者

63

第11章 天と地とのパルチザン

95

第12章 正義の少数者

133

終章 私たちの世界

165

謝辞

201

用法についての覚え書き

209

訳者あとがき

211

参考文献

96

原註

32

公文書館

31

索引

1

上巻目次

プロローグ

序章 ヒトラーの世界

第1章 生存圏

第2章 ベルリン、ワルシャワ、モスクワ

第3章 パレスチナの約束

第4章 国家の破壊者たち

第5章 二重の占領

第6章 グレイター・イーブル

第7章 ドイツ人、ポーランド人、ソヴィエト人、ユダヤ人

ブラックアース（下）

ホロコーストの歴史と警告

第8章 アウシュヴィッツの逆説

アウシュヴィッツは、ドイツ支配下にあるすべてのユダヤ人の殺戮の意図を象徴しているし、ドイツ帝国のあらゆるところから集められたユダヤ人がアウシュヴィッツのガス室で殺害された。ユダヤ人の中にはアウシュヴィッツを生き延びた者たちもいたが、それというのもアウシュヴィッツは死の施設であるだけでなく、最後まで収容所の集合体だったからだ。そこでユダヤ人たちは、連れてこられた時に労働に耐えられるかどうかで選別されたのだった。そうした事情から、アウシュヴィッツにおける生存の物語が集合的記憶に入り込むことが可能となる。ほぼ言葉どおり、死の穴の縁に立ったユダヤ人は生き延びていないし、ほぼ言葉どおり、トレ布林カ、ベウジェツ、ソビボル、ヘウムノに入ったユダヤ人は生き延びていない。「アウシュヴィッツ」という言葉はホロコースト全体のメトニミー（換喩）となっている。もっとも、アウシュヴィッツが主要な殺戮施設になるまでに、過半のユダヤ人はさらに東方で殺害されていたのだ。けれども、アウシュヴィッツがずっと記憶されてきたのに対し、ホロコーストのほとんどは概ね忘れ去られている。

第二次世界大戦後、ドイツにとってアウシュヴィッツは、なされた悪の実際の規模を著しく小さなも

の見えるので、比較的扱いやすい象徴であり続けている。アウシュヴィッツをホロコーストと合体させてしまうのは、「それが起きているとき、ヨーロッパ・ユダヤ人の大量殺戮をドイツ人は知らなかった」というグロテスクな主張をまことしやかなものとした。ドイツ人の中にはアウシュヴィッツで起きていることを正確には知らなかった者もいた可能性はある。多くのドイツ人がユダヤ人の大量殺戮を知らなかったという可能性は、これはありえない。ユダヤ人の大量殺戮は、アウシュヴィッツが死の施設になるずっと前から、ドイツでは知られていたし議論されていた。少なくとも家族や友人の間では語られていた。何万ものドイツ軍が三年にわたって何百という死の穴のうえで何百万というユダヤ人を射殺していた東方では、ほとんどの者たちは何が起きているのかを知っていた。何十万ものドイツ人が殺戮を実際に目の当たりにしたし、東部戦線の何百万ものドイツ人将兵がそれを知っていた。戦時中、妻やなんと子どもたちまで殺戮現場を訪れていたし、兵士や警察官はもとよりだが、ドイツ人は時に写真付きで家族に詳細を書き綴った手紙を送った。ドイツの家庭は、殺害されたユダヤ人からの略奪品で豊かになった。それは何百万例というのではきかなかった。略奪品は郵便で送られたり、休暇で帰省する兵士や警察官によって持ち帰られた。

同様の理由から、アウシュヴィッツは、戦後のソ連、今日の共産主義国家崩壊後のロシアでも、都合の良い象徴だった。仮にホロコーストがアウシュヴィッツに収斂するならば、ドイツによるユダヤ人大量殺戮が、実はソ連が直前まで占領していた場所で始まったことを容易に忘れられるからだ。また、ソ連西部の誰もがユダヤ人大量殺戮のことを知っていたが、それはドイツ人が知っていたのと同じ理由からだった。すなわち東方での大量殺戮の手法は、何万人も参加させる必要があったし、何十万人にも目撃されていた。ドイツ軍は去って行ったが、死の穴はそのまま残された。仮にホロコーストがアウシュ

ヴィッツのみと重ね合わされるなら、こうした経験もまた歴史や記念式典から除外しうるといふわけである。^{*2}

アウシュヴィッツは、ソヴィエト市民が寄与しなかったという点で、ホロコーストのなかの数少ない部分の一つである。ソヴィエト市民はユダヤ人の大量射殺のためにドイツによって徴募されたし、トレブリンカ、ベウジェツ、ソビボルのガス殺の施設を建設し監視の役を果たした。確かに、こうしたことはすべて、ドイツがソヴィエト国家を破壊しようとしたから、またそのソヴィエト市民らが戦前のあり様から解放され、場合によっては己が命を守ろうとしたから可能となったのだ。けれども、戦後になって、ソヴィエトのプロパガンダでは次のことが説明できなかった。すなわち、どのようにして、ソヴィエト体制で生み出されたかくも多数の人民が、ソヴィエト体制で生み出されたかくも多数の他の人民が大量殺戮されるのに協力者として役立ってしまったか、をである。一九五三年の没後から始まり今日にまで至る「スターリン後の時代」で、なぜソヴィエトの政策が一九三〇年代に飢饉とテロルで数百万のソヴィエト市民を死に至らしめたかを説明するのは大変な難問だった。この歴史的現実^シは、今でも徹底して政治的に扱われている。おそらくより奥深い問題である、数万のソヴィエト市民が一〇〇パーセント外国の体制のために、数百万のソヴィエト市民の殺戮に寄与できたということは、一度も取り扱われなかった。それどころか埒外に追いやられてきたのだ。^シ

アウシュヴィッツはまたホロコーストの標準的な略称^シとなつてゐる。というのも、ある種神話的でかつ還元主義的な方法で取り扱われると、アウシュヴィッツはユダヤ人の大量殺戮を人間の選択や行為からかけ離れたものとするように思えるからである。ホロコーストがアウシュヴィッツに局限されるならば、ホロコーストはそれによつて変えられた光景とも、それと関わりのあつた民族のほとんども

無縁のものとできるのだ。アウシュヴィッツの門と壁とは、実際のところ、パリからスモレンスクにまで広がっていた邪悪さを封じ込めているように見える。第二次世界大戦中を除けば戦前も戦後もポーランドの中の小さな区域の範囲を定めたドイツ語の呼称であるアウシュヴィッツは、現実の場所とは思えない。物理的だけでなく心理的にも鉄条網に囲まれている。アウシュヴィッツが思い起こさせるものは、機械化された殺戮とか、無慈悲な官僚制度とか、現代性の進展とか、^{モダニティ}はては啓蒙主義の終着点である。

これがために、老若男女が殺害されたことが、もっぱら人智を超えた力でなされてしまった非人間的なプロセスになってしまう。ユダヤ人の大量殺戮が例外的な場所に局限され、非人間的な処理の結果として扱われるなら、その時点で我々は次のような事実に向かわずに済むことになる。すなわち、狭い区画で、我々とさして変わりのない人間たちが我々とさして変わりのない他者を殺戮したという事実。

ホロコーストの歴史で、アウシュヴィッツは大量殺戮の三番目の技法が展開された場所だった。三番目というのは、時系列でも、重要性でもという意味である。最も重要な技法は穴の上での射殺であった。時系列からも、殺戮したユダヤ人の数からも、大量殺戮による最終的解決が可能であると実際にやって見せた点からも、穴の上での射殺が最重要であった。重要性でも時系列でもその次に来るのは、内燃機関の排気ガスによって窒息させる技法であった。一九四二年初めに、こうした一酸化炭素を用いる設備が使用されだした前後に、すべてのユダヤ人を殺害するという政策は、占領下ソ連・占領下ポーランドから、ドイツ支配下に置かれたあらゆる地域に拡大された。一九四三年から一九四四年にかけて、アウシュヴィッツがユダヤ人の主要な殺戮の場になったのだ。⁴

アウシュヴィッツは、ダッハウ強制収容所、ザクセンハウゼン強制収容所、ブーヘンヴァルト強制収

容所、フロッセンビュルク強制収容所、マウトハウゼン強制収容所、ラーフェンスブリュック強制収容所に次いで、七番目の大規模な強制収容所として出現した。「働けば自由になれ」(ARBEIT MACHT FREI)という第一収容所の入口に掲げられた悪名高い歓迎の言葉は、こうしたドイツの強制収容所の先例に倣ったものであった。この新しい収容所は先の六つの収容所とは異なり、ドイツ帝国によって併合された占領下ポーランドに、いわばナチスの想像力が活発に働く地域に設けられた。一九四〇年における当初の目的は、やがて東方の大帝国をつくる準備としてであった。最初の囚人は、抵抗をしたか、ないしはその懸念があるとして罰せられたポーランド人だった。次の主要な犠牲者は、一九四一年の侵攻後連れてこられたソヴィエトの戦時捕虜だった。こうしたアウシュヴィッツの初期段階では、そこにユダヤ人が入れられるのに限って言えば、占領下のソ連でドイツ帝国建設のために極限まで働かされる奴隷労働者として東方へ列をなして行進させるためであった。アウシュヴィッツの近くに住むユダヤ人は、実際ポーランドのユダヤ人の中でも最後に殺害された中に入っていた。最初は彼らは、強制労働力としてアウシュヴィッツに移送されてきた。それがアウシュヴィッツの元々の使命だったからである。ポーランドの他の地域にいたユダヤ人のほとんどが、穴の上で殺されたり、トレブリンカ、ベウジェツ、ソビボル、ないしヘウムノで殺害されたりしてすでに姿を消した後でも、アウシュヴィッツ地域ではほとんどのユダヤ人はまだ生きていたのだ。

アウシュヴィッツの目的は、ナチスの植民化の使命が最終的解決に道を譲り、スラブ人の征服が優先順位を下げユダヤ人殺害が喫緊となるにつれ、変化していった。この全般的な移行は、ナチスのなすこととのあらゆる領域で明らかだった。列挙してみよう。アインザッツグルッペンによる、ユダヤ人の一部の殺害からすべてのユダヤ人の殺害への移行。元来は他の任務を与えられていたドイツ人警察官をユダ

ヤ人大量射殺に使用すること。補助警察として地元住民を徵募すること。ユダヤ人殺害を手伝わせるためにソヴィエトの戦時捕虜のいくらかを解放すること。ルブリン県を帝国の前哨基地からガス殺施設の実験場に変えること、などである。アウシュヴィッツの場合には、征服の夢が絶滅という現実へと移行したことで、収容所が死の施設になってしまった。殺戮に使われる薬品そのものも進化した。チクロンBという商標登録で売られていたシアン化水素酸は、元々はポーランド人の囚人のバラックを燻蒸消毒するのに用いられていた。その後、ソヴィエトの戦時捕虜を殺害するのに使われ、最後にはほぼ一〇〇万のユダヤ人を殺戮するのに用いられることになる。

アウシュヴィッツは、ポーランド侵攻後に、ポーランドの政治的アイデンティティを持った国民を抹消しようとする試みの一環として、国家が崩壊した地域に建設された。アウシュヴィッツの元々のインフラストラクチャーは、ポーランドの兵舎のものであった。領土としては、そこは、一九三九年九月にドイツによって征服され、ドイツ・ソヴィエト境界友好条約の条項によってドイツのものと認められた地域であった。アウシュヴィッツの建設も、それ以降の改造も、ライバル諸国を消滅させようというドイツの作戦や、SSという国家破壊者の特殊能力と異常な目標がなかったならば、むしろ可能でもなかったろうし、考慮さえされなかったことだろう。

けれども、アウシュヴィッツは一つ重要な点で特別であった。二重に占領された地域や占領されたソヴィエト・ウクライナにあった死の穴とも、ベウジェツ、ソビボル、トレ布林カ、ヘウムノの死の施設とも異なり、アウシュヴィッツは、ドイツがその主権を認めている諸国家のいまだ市民であるきわめて多数のユダヤ人を殺戮するために計画された場所だった。予定されていたユダヤ人犠牲者は、ドイツによる国家破壊の地域でないところに住んでいた、それゆえSSの威風にはるかに抵抗しやすい人々で

あるのが普通だった。そうした人々は、まずは彼らの政府が見捨てるか、市民権を剥奪した後で、居住国からアウシュヴィッツへと移送せねばならなかった。このやり方には自動的に処理できるところはなく、実際にしばしば困難を伴うものだった。

ヒトラーのユダヤ人のいない惑星というファンタジーはつねに存在していたし、ヨーロッパからユダヤ人を排除したいという彼の欲求も、遅くも一九四二年春には部下たちに知らされていた。その時点で、前年にソ連で始められたユダヤ人の大量殺戮は広汎なものとなった。もつとも、その政策がそもそも実現できたのか、またどの程度までかは、ユダヤ人が偶々住んでいた場所次第であった。殺戮の成功した戦略は、東ヨーロッパのある地域に特定された決定と行動の結果であったので、そうした決定と行動とが他の場所でも繰り返して同様の成功を収められたわけではなかった。言い換えれば、一九三九年、一九四〇年、一九四一年に諸国家に起きていたことが、一九四二年、一九四三年、一九四四年にユダヤ人に降りかかることに決定的に重要となるのだった。ドイツは、それまでソ連による支配を経験していない地域では、ソヴィエト支配によって生み出された、心理面とか物質面とか政治面とかのさまざまな資源を利用できなかった。ドイツは、ドイツかソヴィエトが国家を破壊していない地域では、崩壊した国家の断片をかき集めるというわけにはゆかなかった。ドイツは、戦争が「人種の支配の作戦」でない場所では、「相対的剥奪の政治学」を応用できなかった。戦後共産主義ポーランドに建てられたアウシュヴィッツ博物館では、その犠牲者はどこの国の市民権を持っていたかによって分類されている。これは、犠牲者の大多数がユダヤ人であり、殺害された理由はそれだけだという基本的な事実を曖昧にするために、そう設計されたのである。市民権を強調するのは、いっそう微妙だが中核的な事実をも曖昧にする。すなわち、殺されたユダヤ人たちは、まず彼らの国家から切り離されたのだという事実を。

ユダヤ人がそこからアウシュヴィッツに送られることになっている場所には、こうした条件の存在していないものがたくさんあったので、ユダヤ人は生き延びられたのであった。アウシュヴィッツでの死を宣告された数百万のヨーロッパのユダヤ人が、列車に乗せられなかったので死を免れた。アウシュヴィッツに送られるとされていたドイツ支配下のユダヤ人たちが、アウシュヴィッツに送られるとされていなかったドイツ支配下のユダヤ人たちが、これが「アウシュヴィッツの逆説」であるし、国家がどのように破壊されたか、ないし破壊されなかったかを考慮して、はじめてその逆説を解明できる。国家の破壊の問題は、普遍的計画の中の異なった結果を説明する政治的特殊性である。アウシュヴィッツは、ユダヤ人の殺戮という普遍的計画を証している。同時にアウシュヴィッツは、ユダヤ人を保護するうえで国家としての地位を持つことが、どこでも重要であったことを証している。

ドイツ占領下の二つの国家の比較が、政治的要因の重要性を示してくれる。エストニアとデンマークは、第二次世界大戦が始まった時には共通のものをたくさんに有していた。どちらもバルト海に長い海岸線を持つ北ヨーロッパの小国だったし、それぞれ少数のユダヤ人が住んでいた。戦時中に両国ともドイツ占領下におかれ、両国とも最終的解決を受け容れなければならず、両国ともドイツ占領当局から「ユーデンフライ」(judenfrei)——ユダヤ人のいない状態——を宣告された。にもかかわらず、両国でのホロコーストの歴史はこれ以上ないという差を見せている。(一九四〇年六月に)ソ連に占領されたエストニアでは、一九四一年七月にドイツ軍がやって来たときに居住していたユダヤ人の実に九九パーセントの人々が殺害された。デンマークでは、市民権を持つユダヤ人の九九パーセントが生き延びた。デン

マークでは、ユダヤ人をアウシュヴィッツに向かわせるよう指令が出された。エストニアのユダヤ人は、アウシュヴィッツが死の施設になる以前に死への道を辿った。

ドイツ占領下でエストニアほどユダヤ人の死亡率が高かった国はなく、デンマークほど生存率が高かった国もない。ユダヤ人殺戮というドイツの政策の徹底ぶりに鑑みて、この差異には説明の要がある。よもやエストニア人は反ユダヤ主義で知られていたとか？ いずれにせよ、反ユダヤ主義の伝統はデンマークでも容易に証明できよう。よもやエストニアは、戦前は反ユダヤ主義者が統治していたのか？

大統領コンスタンティン・パッツと陸軍総帥ヨハン・ライドネルの二重独裁政治は明らかに保守的であったが、一九三四年極右に対するクーデターで政権の座に就いたのだった。実際、エストニアのユダヤ人は共和国の平等な市民であり、共和国はオーストリアやドイツからいくらかのユダヤ人難民を引き受けた。デンマークは、対照的に、一九三五年以降はユダヤ人難民を追い返した。

直感だけでは過つものだ。^{あやま}極端に異なった結果は、国民の態度や戦前の政治とはほとんど関わりがないように思えるし、戦争と占領の経験の仕方が異なっていたこととの関わりが大きいと思われる。アウシュヴィッツは我々にヒトラーの「ユダヤ人のいない世界」というヴィジョンを思い起こさせるが、それはまた我々に、そのヴィジョンの実現を早めるか妨げるかという点で、政治の重要性を教えてくれるのだ。

エストニアは、一九四〇年に、リトアニアやラトヴィアと運命を共にした。三国とも、一九三九年九月にドイツ・ソヴィエト境界友好条約として修正・追認を経た、モロトフ・リッペンントロップ協定の条項によりドイツがソヴィエトに委譲した。ソヴィエトのエストニア占領は、エストニアの高位行政官と

政治エリートを完膚無きまでに破壊した。たとえば、コンスタンティン・パツツ大統領は自分の農場から連れ出されてソ連に移送され、紆余曲折はあったが、ソ連で客死した。陸軍総帥ヨハン・ライドネルも、移送され、後に客死した。最後のエストニア内閣のメンバー一名のうち、一〇名が投獄され、そのうち九名は殺された（処刑されたもの四名、ソ連の収容所で死亡五名）。

「エストニア国家は存在していないだけでなく、かつて存在したこともない」という論理で、ソヴィエトの法が遡及して占領下エストニアでも適用された。よって、一九二〇年代、一九三〇年代に国家公務員だったことは犯罪と見なされた。早速ソヴィエト・エストニアになった国で、新しいソヴィエト政権はおよそ四〇〇の処刑を行い、ドイツ軍が一九四一年六月にソ連侵攻に備えて終結するにつれ、大量移送の準備を進めていた。六月一日の晩に、ソヴィエトのNKVDは、エストニア総人口の一パーセント（そして、ソヴィエトの圧政下でとてつもなく比率が高すぎるが、ユダヤ人マイノリティのおよそ一〇パーセント）にあたる一万二〇〇〇人と推定されるエストニア市民を移送した。その数日後、ドイツ軍がバルト諸国を北へと急行するのにつれ、ソヴィエトはエストニア人の囚人を射殺し、死体は刑務所に残していった。

ドイツ軍は一九四一年六月初めに、精選したエストニア人を伴ってエストニアに到達した。リトアニアやラトヴィアでと同じく、ソヴィエトによるエストニア支配は数千人のエストニア人に逃亡を余儀なくさせていたが、ベルリンに向かった者も多かった。そのためドイツは将来の対独協力者を選ぶことができた。たくさんのエストニア人が帰還を願っていたので、ドイツは、自分たちの目的にいちばん役立ちそうなエストニア人を選ぶことができたのだ。他と同じでも、二重の占領は、政治エリートを二重に篩にかけたことを意味した。ソヴィエトはそれまでの支配階級を破壊してしまった。今度はドイツが、十分に言いになるようには思えない人間については帰還を妨げた。当然、ナチスの選別は政

治的には左翼や中道を除外するものだった。その年の夏、他のどこも同じで、ドイツは、ソヴィエトによる占領によって生み出された心理面、物質面、政治面での資源を利用できた。

ラトヴィアやリトアニアでと同じく、エストニアの政治面での資源はきわめて豊富だった。たった一年前に屈辱的であくどいやり方で国家がまるまる破壊されていたので、国民は個人的にも政治的にも償いを求めていた。アインザッツグルッペAがエストニアに到着した一九四一年七月までには、ドイツ人は彼らのもたらず解放はユダヤ人からのものであり、そうした解放に住民が参加するのは政治交渉の前提条件だ、という主張を万端整えていた。リトアニアやラトヴィアでと同じく、選別されたエストニア人は、ドイツ人自身が理解していなかっただろう要素も付け加えて、このメッセージの翻訳者の役割を果たしていた。その要素とは、仮にエストニア人が二番目の占領者（ドイツ人）に協力すれば、初めの協力（ソヴィエトへの）は忘れ去られるだろうというものであった。ユダヤ人のポグロムはエストニアでは起こらなかったし、ドイツにとつてもそのようなものは不要に思えたのだ。

二重の協力はきわめて広範囲に広がった。エストニアの「自警団」(オマカイツェ、Onakaitse)として知られる反ソヴィエト・パルチザンのいくらかは、ユダヤ人を殺害した。そうしたパルチザンの中で最も熱心だったのは、ドイツの侵攻が始まったので、汚名を雪ぐ^すためにドイツ側に寝返っていたエストニア共産主義者たちだった。ソヴィエトによるエストニア人やユダヤ人の移送に協力したエストニア人の警察官たちは、今ではドイツによるエストニア人やユダヤ人の殺害の片棒を担いでいた。ソヴィエトが四五〇人のユダヤ人を含めおよそ一万人のエストニアの市民を移送したのに対し、ドイツ支配下では、九六三人のユダヤ人を含めおよそ一万人のエストニア市民が処刑された。エストニアのそのような犯罪実行者の観点では、どちらの仕事もさして変わるものではなかった。^{*10}

ソヴィエトのNKVDに以前雇われていた者たちは、エストニアのユダヤ人殺戮でとりわけ重要な役割を果たした。たとえば、アイン・アーヴィン・メレはNKVDの工作員であり、またエストニア・ラIFル兵団の特殊部門を率いていた。この兵団は、資本主義者の侵攻からソヴィエト・エストニアを守るものとされていたソヴィエトの部隊であった。豹変したアイン・アーヴィン・メレはドイツ人の下で、一九四二年五月から一九四三年三月まで、指揮官としてエストニア保安警察に入った。エストニア保安警察は、ユダヤ人殺戮の任を負わされた主要な組織であった。一九四三年四月から戦争終結まで、メレは武装親衛隊の一つの師団の大隊長であった。戦間期にはエストニア警察官であったアーヴィン・ヴィクスは、一九四〇年から一九四一年にかけてはNKVDのために働いた。その後ヴィクスはドイツ人指揮下のエストニア保安警察に入ったが、そこで彼はユダヤ人もそうでない者も含め数百人の処刑を命じた。アレクサンデル・ヴィイデイクは、戦前はエストニア政治警察の一員だったが、その後一九四〇年にはソヴィエトのNKVDのために働いた。ドイツ軍の侵攻後は、ヴィイデイクはSD（親衛隊保安部）のために働いたが、そこでヴィイデイクは、彼の以前のソヴィエトとの連絡員を徴募した^{*11}。

他のどのことと同じで、エストニアでも、ドイツ占領下でユダヤ人を殺害した者たちは、ユダヤ人以外も殺害した。占領下のリトアニアで、一九四一年に一五万人以上のユダヤ人の射殺に加わった警察官たちは、同じような数のソヴィエトの戦時捕虜が餓死した収容所の監視役も務めた。ラトヴィアでは、ラトヴィアのユダヤ人を殺害したコマンドは、精神病患者もベラルーシの民間人も殺害した。エストニアにはユダヤ人がごく少数しかいなかったため、ユダヤ人以外の殺害が他所と比べて重要だった。ドイツ支配下で殺害された総数九六三人のエストニアのユダヤ人は、たいがいは警察官だったエストニア人に殺害されたのだ。そして、そのおよそ一〇倍の非ユダヤ人も、同じそれらのエストニア人警察官によつ

て殺害されたのだった。^{*12}

デンマークでは、ほとんど何もかもが異なっていた。フィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトアニアなどの他の北ヨーロッパ諸国と異なって、デンマーク王国はソ連と国境を接していなかったし、モロトフ・リッペントロップ協定の対象でもなかったし、赤軍に支配されたこともなかった。一九三九年にドイツとソヴィエトとが協同してポーランドに侵攻して第二次世界大戦が始まったとき、デンマークは巻き込まれなかった。ソヴィエトの侵攻もなかったし、エリート層もソ連の慣行である大量射殺と移送の被害を受けなかった。エストニアで生じたような政治面での資源も、デンマークでは生み出されようがなかった。何せ、デンマーク国家は一度も破壊されなかったからだ。占領が一ヶ国によるものだけの時には、二重の協力は考えられなかった。

一九四〇年四月に起こったドイツのデンマーク占領は、緩やかなものだった。ドイツにとってデンマークは、イデオロギー上の敵ではなかったし、人種的な標的でもなかった。また、その領土に侵攻したのは軍事的な理由だけで、裏はなかった。ドイツは、ポーランドではすでに行っていたし、すぐにソ連でも行つたようには、攻撃した国家が「もはや存在していない」などと宣言したりはしなかった。それどころか、ドイツの占領は、明らかにデンマークの主権を元にして進められていた。ドイツ人は自分たちが「デンマーク王国の領土面での一体性や政治的独立を損なうことをめざす」ことはありえないと明言していた。クリスチアン国王はコペンハーゲンに留まり、元首として支配していた。民主的な選挙は続けられていたし、議会も機能していたし、政府が交代するのもデンマーク人がどう願うか次第であった。一九四一年以降、予期せぬほど長期化した実りのない東方でのドイツの軍事行動の間、デンマーク

のドイツ帝国における主要な役割は食糧を供給することだった。確かに六〇〇〇名のデンマークの男たちが武装親衛隊に入隊したし、その中のいくらかは第五SS装甲師団「ヴァーキング」でエストニア人と一緒だった。^{*13}

最終的解決が一九四二年に占領下ソ連から西の方、ヨーロッパの残りの部分に広がった時に、ドイツ「デンマーク関係に罅が入った。デンマーク当局は、ユダヤ人市民をドイツに引き渡すのは、デンマークの主権を損なうことになる」と理解していた。一九四二年一月に、アメリカ合衆国、イギリス、ソ連が、ドイツによるユダヤ人殺害に協力した者は戦後になって由々しい結果に向き合うことになる、そう警告を発した。デンマーク政府のような主権国家の政府は、そのような警告を気に留める立場にあった。一九四三年初め、ドイツ軍がスターリングラードで降伏すると、戦況は目に見えてドイツに不利になっていった。コペンハーゲン是最終的解決に参加する理由がcaつてないほど薄弱になっていたし、一方デンマークのドイツ占領当局もデンマーク人との離間を招く理由がcaつてないほど薄弱になっていた。^{*14}

ユダヤ人の排除はそれでもベルリンにとってはつねに優先事項であつたし、デンマークの占領当局の司令官ヴェルナー・ベストにとつてもそうであつた。ベストは、当初のベルリンへの連絡では、それが憲法に反し政府崩壊につながるだろうから、デンマークでの最終的解決は実行不可能だと主張した。そうなれば、ドイツの大幅な介入が必要となろうし、それまでに達成されていた好意的な均衡を崩してしまふだろう。しかし、デンマーク政府が他の理由から倒れたときに、ベストはユダヤ人殺害の機会を見出した。彼の考えでは、新政府が樹立される前の幕間の不安定な時期に、殺害をやつてのけることができるはずだった。一九四三年九月初めにベストは、ベルリンに向かって適切な進言をした。

意志のあるところに道はなかった。九月二〇日にルドルフ・ミルドナーが、デンマーク保安警察及びSD司令官としてコペンハーゲンに赴任した。ミルドナーは、占領下ポーランドのカトヴィツェから直接やってきたが、そこでは彼は、アウシュヴィッツを管掌するゲシュタポの責任者だった。言い換えれば、ミルドナーは、ユダヤ人大量殺戮の経験のない人間ではなかったのである。それでも、コペンハーゲンで見たことからミルドナーは、少なくとも国家のない地域で達成されてきたような最終的解決は、デンマークでは不可能だと確信した。コペンハーゲンでは彼の前に、遙か東方では廃された組織が立ちだかった。挙げてゆけば、主権国家、信念を持ち支持を受けている政党、さまざまな形の地元の市民社会、協力を頼みにできぬ警察力、である。他のドイツ当局筋もすでに同じ結論を引きだしていた。デンマークにおける陸軍司令官は、ユダヤ人に対するいかなる行動においてもドイツ警察を支援することを拒んだ。海軍の港湾司令官は、海岸線を、デンマーク人が何をやりたがっているにせよ空けておいてやるために、ユダヤ人を狩り集める日として選ばれた一九四三年一〇月二日には、あらゆる艦船を修理に出してしまった。彼はまた、社会民主党の政治家連中にその日付を教え、今度は彼らがデンマーク・ユダヤ人にそれを知らせた。

デンマークの隣国スウェーデンは、戦争においては中立だったが、ドイツの戦争努力の経済的側面では共犯者だった。一九四三年にはそのスウェーデンが、連合国側への傾斜を明確にする理由に事欠かなかった。スウェーデン政府は今回はドイツに向かつて、スウェーデンがデンマーク・ユダヤ人を引き取ろうと提案した。デンマーク・ユダヤ人に、スウェーデンにゆけば歓迎されるのだと理解させるために、周波数を開放してラジオで何度もその提案を流した。それを受けてデンマーク人は、自国のユダヤ人をスウェーデンに送り届けるために小型船隊を組んだ。ドイツ警察はこの企てを知っていたが、止めはし

なかった。ドイツ海軍も、デンマークの大小の船が自分たちの傍らをゆつくりと進むのを眺めていた。デンマーク市民は、同胞の市民を自分たちの国で救うのは犯罪ではないので、ほとんど身に危険を感じずにやってのけた。一〇月二日のドイツ警察の急襲でも、デンマーク市民権を持った六〇〇〇人程度のユダヤ人のうち四八一人しか捕まえられなかった。主権国家デンマークの政府が、つかまつたユダヤ人市民に代わってベルリンとの調停に入った。解放された者もあり、残りも皆、アウシュヴィッツにではなく、チェコスロバキアにあった小さな要塞都市テレジンに造られたテレジンシュタット収容所に送られた。ガス殺されたのはただの一人もいなかった。けれど、他の国から連れてこられたユダヤ人たちは、デンマークからのユダヤ人を受け入れるために、テレジンシュタット収容所からアウシュヴィッツに送られて殺害された。ドイツ当局は、彼らの収容所でのユダヤ人の生活の、外見だけからは良好な状態を見せるプロパガンダ映画を制作するのに、デンマークからのユダヤ人を利用した。^{*16}

デンマーク市民であったユダヤ人は生き延びたが、デンマークにいたユダヤ人が生き延びたというのはちよつと違った。デンマーク当局は一九三五年以降はユダヤ人難民を受け容れていなかったし、それ以前にデンマークにやって来ていたユダヤ人のいくらかはドイツに移送したのだ。デンマークにおいて国家の保護を拒まれたユダヤ人は、エストニアで、あるいはこの点では他のどこでも同じだったが、国家の保護を得られなかったユダヤ人の運命を辿った。すなわち、死である。^{*17}

占領下エストニアは、すべてのホロコーストが起きた「国家のない状態」にある地域に含まれていた。エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ポーランド、ソ連西部で、ヒトラーの「グローバルな人種戦争」というヴィジョンは、「国家のない状態」という条件下、新たな政治形態へと変換された。そうし